夜の王

鳴嚙平介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜の王

【コード】

N0819Y

【作者名】

鳴嚙平介

【あらすじ】

最愛の人を救う為、僕は世界を敵に回した。

一章

「これをもって、レギナ・フォルミドを王室付き魔法使いに任命する。以後、王国に忠誠を誓い、王国の為にその力を使いなさい」と、カナリアス・ヴェルベツトは言った。

「見に余る名誉、有り難く頂戴致します。この身が、王国の為にならんことを」

それに対し、黒髪の青年　レギナ・フォルミドは深々と頭を下げ慇懃な態度で応えた。

「……しかし、少し前まで赤ん坊だった君が、王室付きに選ばれるとはな。感慨深いよ、レギナ君。会うのは何年ぶりだろうか。たまには遊びに来说いと言ってあったのに」

カナリアスはそう言って意地悪な笑みを浮かべた。

「すみません……ですが、一刻も早く王室付き魔法使いになり、王国の為に働きたかったのです。それが、カナリアスさんへの一番の恩返しになるかと」

レギナは申し訳なさそうに笑いながら言った。

カナリアス・ヴェルヴェツトは、王室付き魔法使いを束ねる王の側近であり、実質的にこの国の第二の権力者だ。レギナにとっては幼い頃から家ぐるみでの繋がりがあったこともあり、親戚のような関係で、そして、彼はレギナの両親が他界してからというもの、天涯孤独の身となったレギナを色々と支援してくれている、レギナにとってはかなりの恩人なのだ。

「恩返し？ そんなことは気にするな、レギナ。君のお父さんには私も世話になった。……それに、君の成長を見守るのが、私の人生の楽しみの一つでもあるんだよ。」カナリアスは優しい笑みを浮かべて言った。「私は君のことを、本当の息子のように思っているんだからね」

「……これからは、お屋敷の方にも顔を出すようにします」

「ああ、そうしてくれ。妻もアイギスもきつと喜ぶ……アイギスとも、随分会っていないんだって？ 寂しがっていたよ、あの子も」
「ここ一年ほどは、学院で魔術修業に没頭していたので……」
「会いに行つてあげてくれ。この時間はきつと、屋上にでもいるだろうから。……おつと、寂しがっていたと私が言ったことは内緒にしといてくれよ？ あの子は、怒ると怖いんだ」
「分かりました」と言つて、レギナは笑つた。
「時に、レギナ君」カナリアスは咳ばらいを一つする。彼の眼鏡の奥の目が、真剣な色を帯びる。

「夜の王」は、まだ君の前に姿を現さないのかい？」
レギナは息を呑む。

「……はい。何度も喚起Invocationはしているのですが……」
「ふむ。」夜の王”は謎の多き悪魔だからな。フォルミドの開祖が結んだ契約が今なお子孫に受け継がれているということ自体、俄かには信じ難いことだし……」

”夜の王” それはフォルミド家に代々仕えている悪魔だ。いや、そもそもそういつた普通の悪魔との間で結ばれるような主従関係が、かの悪魔との間にあるのかどうかも怪しい。”夜の王”は、フォルミド家の当主となつた者の前にその姿を現し、その力を貸すという。本来、こちらが喚起Invocationしなければ姿を現さない悪魔と違ふのは、”夜の王”はあくまで自発的に当主の前に姿を現し、逆にこちらからの呼び掛けには一切応じないということだ。
「フォルミド家の魔術刻印はしつかり移植されたんだろう？」
「はい……」

フォルミドの魔術刻印。フォルミド家の魔術研究の結晶であり、同時にフォルミド当主の証であるそれはレギナの父の遺体から余すところなくレギナの背中に移植されていた。

「或いは、何か他の条件があるのか……」

「……父からは、何も聞いていませんが」

「ということは、もっと根本的なことなのかもしれない。当たり前

過ぎてわざわざ言葉にするまでもないことだ。何か心当たりはある？」

「……いえ、すみません、わかりません」

申し訳なさそうにするレギナに、カナリアスは気にしないでくれ、と行って軽く微笑む。そして溜息をついた。

「すまない、こんなめでたい時に。謎を追求してしまうのは僕の悪癖の一つなんだ。よく妻に窘められる」

「いえ、大丈夫です。確かに、これは向き合わなければならぬ深刻な問題ですから」

「そうだね。」夜の王”さえ呼び出せば、君はあのマグルドでさえ圧倒できる力を手に入れるだろうから……僕の方でも色々調べておくよ」

「すみません、ありがとうございます」

気にするな、と言ってカナリアスは椅子から立ち上がった。そして、机を周ってレギナの前へ来ると、握っていた手を開いた。

「これを君に」

そこには、百合の花をモチーフにした首飾り。それはヴェルベツト家の家紋だった。ヴェルベツト家の人間にしかつけることを許されない家紋。

レギナは驚いてカナリアスの顔を見た。

「本当におめでとう、レギナ・フォルミド。これは、私からの御祝いだ。ヴェルベツト家はいつでも君の力になる。困った時は構わず頼ってくれ。我が息子よ」

「……本当に、ありがとうございます」

レギナは目頭が熱くなるのを感じて、咄嗟に顔を逸らした。カナリアスはそんなレギナの肩に手を置き、優しく微笑んだのだった。

レギナが屋上の扉を開くと、空の青さと金色の髪が真つ先に目に飛び込む。肩より少し上で切り揃えられたそれはまるで金細工のよう美しい光を放っていて、耳の上のところを百合の髪飾りで留められている。彼女の名前はアイギス・ヴェルベット。カナリアスの一人娘であり、レギナにとっては姉のような存在だ。「アイギス」と、レギナが声をかける。

彼女は彼の方を見、そして笑った。

「ちよつと背が伸びたか？ 髪も伸ばしたんだな。聞いたよ。おめでとう、本当に」

「ありがとうございます」とレギナは照れ臭そうに言う。

「少し前までお姉ちゃんお姉ちゃんと私の後ろを着いて回っていたお前がな……感慨深いよ」

「それ、カナリアスさんにも同じようなこと言われましたよ」

「む……そこまで年寄りになったつもりはなかったんだけどな」

と、二人は笑い合う。

「任命式はいつ？」とアイギスがきく。

「一週間後だと聞きました。王の間で、行われるんですよ」

「うん、そう。王との謁見、緊張してる？」

「そりゃあ、まあ」

王との謁見を許されてる人間はこの国では限られている。王室付き魔法使いと、軍の上部、あとは王に仕える一部の従者のみだ。この国創立当時から続く伝統なのだという。

「私も、そうだったよ。懐かしいな」

「五年前でしたっけ。最年少の王室付きとかいって騒がれてましたよね」

アイギスは十九歳で王室付き魔法使いとなった。王室付きの平均年齢は時代と共に下がっていったが、それはその中でも一際

若く、当時はかなりの物議を醸した。しかし、学院の魔術科の最終学年時、卒業試験の一環として実戦投与されたアイギスの力は周知の事実だったため、結局、表立っての反対もなく、彼女は当時最少で王室付きに就任したのだ。

「あくまでも当時、だけどな。今の王室付きには十二歳なんていう破格の天才がいるし」

「十二歳ですか!？」

「うん、一般にはあいつの存在は公表されてないがな。あいつは若すぎるし、そしてクレイジー過ぎるから。そういうシステムがあるのは知ってるだろ？」

「……まあ、一応」

王室付き魔法使いはこの国の魔術師にとっての最高峰だ。それは最高の名譽であるし、その地位もまた王室によって保証され、あらゆる免罪特権が付与される。王国に忠誠を尽くす、という点さえ遵守すれば。故に、王室付き魔法使いは破格の天才の集まりであり、そして破滅的な人格破綻者も多い。現在この国にいる王室付きは十四人、しかし、一般的に国民に認知されている”王室付き魔法使い”は、レギナを含め四人だけだ。それ以外の王室付きは、その人間離れた人格や容貌のせいで、その存在を隠されている。彼らは一般的には”化物”や”狂人”と呼ばれ、蔑まれる存在だから。

きつとその十二歳の天才も、そういう類なのだろう。人格か容貌か、はたまたどちらもが、壊滅的に人の道から外れてしまっているのだ。

「レギナ、覚悟しておけよ」と、アイギスがそれまでとは打って変わって、真剣な表情でレギナの眼を見据えた。

「お前はこれから、この王国の深淵に足を踏み入れていくんだ。生半可な覚悟では、きつとそのうち壊れてしまうだろう。その先にあるのは破滅の道だ。自分を殺すか、はたまたお前も狂人へと身を落とすか。だから、自分を強く持て。そして自分の正義をしっかりと見極めろ。レギナ・フォルミド。お前は、何の為にその力を使

う?」

「俺は」「レギナは言った。「俺の魔術はこの国の平和の為にあります。俺の正義は、王国の平和と国民の安寧を守ること、です」その回答に、しかし、アイギスは鼻を鳴らす。

「平和か。ならば、平和の為に、どんな犠牲も厭わない覚悟が、お前にはあるか? 平和を謡えば、そうだな、どんな所業も正義の名を冠するだろう。死人の丘で嗤う怪女も、肉親を人形に仕立てあげた鬼子も、正義だろう。それらを正義として、お前は認めることができるのか?」

一瞬の迷いもなく、レギナは即答した。

「それが、より多くの国民の幸福に繋がるのならば、それは紛れもない正義です」

二人の間に、重苦しい沈黙が流れる。アイギスはレギナを睨みつけるかのように見据え、その視線を緩めようとしなかった。

「……なるほど、それがお前の正義か。うん、それも、良いだろう」しかし、そう言って先に沈黙を破ったのはアイギスだった。

「変わったな、レギナ。三年前のお前とはえらい違いだ」

「……ありがとうございます」

その、真意の定かではないアイギスの言葉を、レギナは褒め言葉と受け取った。

「すまん、堅苦しい話をしてしまったな。私の悪い癖なんだ……あー、そういえば、父が屋敷に食事に来いと言っていたが」

「ああ、はい。近い内に何うと思います」

「うん、じゃあその時には先に連絡をくれ。仕事で行けないなんてことになったら、悲しいからな」

「分かりました」

と言って、レギナはアイギスの横へと歩いた。屋上のフェンスからはこの街が一望出来る。煉瓦造の町人街、露店の建ち並ぶ大通り、そして、その大通りを上ると、王の住む宮殿がある。

「いつもこの時間はここにいると聞きました」レギナが言う。

「お父様か？ うん、私の背負ったものを確かめるために、な」とアイギスは言った。

「頑張ります、この国の平和の為に」

「 そうだな。この国の平和の為、にな」

何故か、そう言うアイギスの瞳はどこか辛そうだった。

レギナのことを変わった、と彼女は言うが、彼女もまた三年前からは随分と変わった。長かった髪が短くなっていたのもそうだし、三年前の彼女は つまり、戦場に出る前の彼女は、こんな悲しそうな眼をしなかった。

「アイギス、あなたは」

「ああ、そうだ、レギナ」

レギナの言葉を遮って、アイギスが一転、笑顔で言う。

「彼女は出来たのか？」

「は？」

「いや、お前、学院に三年間もいたんだろう。一回くらい、そういうのがあってもおかしくはないじゃないか」

「いや……期待に添えず申し訳ないんですけど、ありませんから」とレギナが呆れた風と言う。

「そうなのか？ 別に顔は悪くないのにな。性格だって良いし、まあ若干押しが弱いところがあるが」

「三年間魔術修業に明け暮れる毎日でしたし……それに、俺の隣にめっちゃくちゃモテる奴がいましたから」

「ふうん？」

「本人にそんな自覚は全くなかったんですけどね……曰く、眼がヤバい、とか。あいつの眼を見てけっこうな女性が虜になりましたから」

「面白い友達がいるな……そいつも魔術師？」

「いえ、そいつは奇策室志望でした。飛び級で一年間で卒業して、もう副室長に就任したって」

「奇策室副室長 カイン・マグナスか？」

「ああ、そうです。ご存知なんですね」

アイギスは感嘆の溜息を吐いた。

「軍内部じゃかなりの有名人だよ。話を聞く限り、頭脳は多分国内一だろうな……まだ会ったことはないが。なんだ、彼と知り合いなのか」

「ええ、まあ。友人です」

「……ふふ、私も会ったら惚れてしまうのかな」とアイギスが面白そうに笑う。

「さあ。やっぱり全員が全員って訳でもないですから」とレギナが言いかけたところで、

「レギナっ!」

屋上の入口で声がした。

二人が驚いて振り返ると、赤い髪をした美しい顔立ちの青年が肩で息をしながら立っていた。

「レギナ、おめでとう!」

その少年はそう叫ぶと走り寄り、レギナを強く抱きしめた。

「お前は本当天才だ! おめでとう! おめでとう!」

「カ、カイン! 苦しいから……っ!」

レギナがそう言っただけで赤い髪的美丈夫　カイン・マグナスの背中を軽く叩くと、カインはようやくレギナから離れる。それでも興奮覚めやらぬ表情で拳を握りながら熱弁する。

「くっそーっ! 俺より偉くなりやがって! 悔しいぜ! けど嬉しいぜ! いやあ、流石俺の親友だ!」

国内一の頭脳とアイギスに称されたカイン・マグナスは、意外と熱血漢らしかった。

「……あー……レギナ、彼が……?」

アイギスは突然の来訪者に困惑したようにレギナに問う。

「あー……紹介します。カイン・マグナスです」

そう言われてカインはやっとアイギスの存在に気付いたようで、初めて彼女に視線を向けた。

「あ、ごめんなさい、取り乱しちゃって……初めまして、奇策室副室長を務めてます、カイン・マグナスです。えっと、あなたは王室付きの……」

「王室付き魔法使い序列第二位、アイギス・ヴェルベットです。よろしく、カインさん」

アイギスは慇懃な態度で頭を下げる。カインも慌ててそれに倣う。「あはは……すみません、俺田舎者だもんで、礼儀とか疎いんです。

あ、あと敬語は大丈夫ですよ。王室付きの方に敬語とか使われちゃうといたたまれないんで……」と、カインは苦笑する。

「いえ……あなたの功績は十分、尊敬に値するものです。　だが、まあ、そう言うなら甘えさせてもらおうかな」と、アイギスは笑った。そしてレギナに小声で言う。「……レギナ、お前の言う意味が分かったよ。流石に、惚れるまではいかないが。

じゃあ、お二人さん、私は行くよ。」

「あ、じゃあまた、今度」

と、レギナが言い、カインが会釈して、アイギスは屋上を去った。

カインがため息をついた。

「……いやー、なに、あのアイギス・ヴェルベットとどういう関係？」

「幼なじみ、みたいな感じ」

「へえ。……お前も、顔が広いな。」

「そんなことはないさ。友達は少ない方だと自負してるよ」

「悲しいこと言うなよ……」カインは苦笑する。「まあ、いいさ。

そんなことより　「カインは言った。「本当におめでとう、レギナ」

「……ああ。これで、俺達の夢にまた一步近付いた」

「そうだな。そして本当に大変なのは、ここからだ」

二人の夢　この国の平和と安寧。つまり、レギナの正義とはカインの正義なのだ。二人は学院時代に意気投合し、その正義の為に自身を磨き上げてきた。レギナは魔術を、カインはその知識を。結

果、彼らはその年齢からは想像もつかないほどの地位と名誉を得た。そんな偉業も、その果てしない夢があつてこそだ。

「さあ、レギナ。みんな、お前の御祝いの為に来てくれてるんだ。任官式の日じゃあ、そんな暇ないだろうからな。」

「みんな……つて、キリ達か！」

「ガルに、アルセイフ、トークもいるぜ」

レギナは顔を綻ばせた。

「そっか、みんなわざわざ来てくれたのか……カインも、ありがとう。仕事忙しいのに」

そう言うレギナに、カインは肩を竦める。

「気にするな。毎日毎日無能共と顔付き合わせて無意味な戦略会議どうせ、ちゃんと仕事してますよ、って体裁を示すのが目的なんだ。

……戦争は休戦中なんだ、それに革命軍も最近は大人しいもんだ。

一息つかないと精神的にやられちまう」

百年近く続いている東の王国と西の王国の戦争は、二年前から一時休戦となっている。それは東が戦争を優位に進めていたところで、国内で革命軍なるものが現れ、戦争どころでは無くなつてしまったからだ。急遽東が出した休戦条約に、西はすぐさま合意した。西も彼らの最高戦力 ” 聖者 ” を二人失っていたので、その提案は願つたり叶つたりだったのだ。

次の戦闘開始は三年後、と決められた。故に、現在王国はかりそのめの平和を享受している。勿論、奇襲なんて当然のように行われるこの戦争において、そんなものは全く意味はないのだが。西に潜り込んでいるスパイから情報が入れば、もしくは革命軍さえ駆逐すれば、いつだって臨戦体制に入る。

「それに、次の戦争の陣形も戦術もほとんど決まってるしな。もう明日にでも、戦争出来るぜ」

「……流石。じゃあ、今日は飲み明かそうか。どうせ俺も、もうそんな暇もなくなるし」

「ああ、早く行こうぜ」

”王室付き魔法使い”と”聖者”は、互いが互いに人知を超えた存在だ。だが、現在は聖者の方が王室付きより優勢だと言われている。ならば西の国の方が優勢なのかといえば、しかし、東の軍隊の銃火器と戦術家は西より優秀だ。つまり、結局のところ総合的には両者の力関係は拮抗しているのだ。それがこの戦争が終わらない一つの要因だった。十年前の戦争時は全く逆で、王室付きの質では遙かに聖者を凌駕していたが、西には優秀過ぎる参謀がいた。その時も結局、決着は着かなかった。そんな風に、何故かいつの時代も両国の力関係は拮抗しているのだった。

それに加えて 両者が隠し持つ最終兵器、”始まりの悪魔”と”神々の秘宝”。名前だけが出回るそれらの実態を、両国はまだ知らないのである。曰く、”世界の終焉”。正体不明が故に、そんな風な仰々しい名で呼ばれるようになった。しかし、それが果して単に仰々しい名なのかも、また両国には分からないのだ。故に、この戦争は終わらない。先に最終兵器の実態を知られた方が、負けるからだ。どちらかが痺れを切らして最終兵器を使うか、或は決定的な情報を漏らすか、結局のところ、行き着く先は情報だ。だから、この百年戦争は、相手をいかに追い込み、最終兵器を使わせるか、にある。それから戦争本番と言っても過言ではない。

百年戦争は、故に、まだ前哨戦に過ぎないのであった。

「あー……飲み過ぎたなあ……」カインが顔を真っ赤にして呟いた。その後、カインに連れられて酒場に行ったレギナは学院時代の友人と再会を果たした。それから今まで 午前二時を少し回ったと

ころだ　歌って踊って騒いで、かと言えば思い出話に花が咲いてしんみりして、そうかと思えばまた騒いで、とても六人しかいないとは思えない程の宴会ぶりで、とうとうレギナとカインを除いてみんな酔い潰れてしまったのだった。

「こいつら……俺の時といい、ただ騒ぎたいだけじゃないのか……？」とカインが言った。

「まあいいじゃないか。楽しく飲めるっていうのは何よりだよ……お前の副室長就任の時の方が酷かったな。こいつら、酒も飲んでないのに酔っ払ってたから」レギナは笑う。

「ああ……学院の伯母さん、マジで焦ってたな。間違えて酒出したんじゃないかって」

「規則破ると煩かったからな、ガンダルシア教官。本当怖かった」

「いや、でもさ、学院対抗試合で俺らが優勝した時、泣いてたじゃん、教官。俺あれでもらい泣きしちゃったんだよな」

カインが語る懐かしい思い出に、レギナは笑う。

「そんなことあったな。あれ、確か二十年振りの優勝だったんだろう？　教官、本当嬉しかったんだろうな」

「俺も嬉しかったぜ。あの鬼教官を泣かすなんて、学院の歴史に残る快挙だ」

「お前はその後と直ぐ軍に引き抜かれてな。ガンダルシア教官あの後三ヶ月くらいずっと落ち込んでたんだぞ？　よっぼどお前に入れ込んでたらしい」

「知ってるよ、手紙が何十通来たことか。室長に本気で心配されたんだぜ。ストーカーに悩まされてるんだったら、護衛付けて上げましょうかって」カインは肩を竦める。

「ガンダルシア教官をストーカー扱いか。面白いな」レギナはそう言って苦笑する。

カインは酒をぐいとあおり、夢見心地な眼をして言う。

「あの頃は本当、毎日が楽しかった。　まるで、家族が出来たみたいだった」

「……………」

カイン・マグナスは、戦争で親を亡くした。そして、身寄りのなかった彼は幼少期を孤児院で過ごし、十六の頃、学院の軍部戦術学科に奨学金で入学したのだ。

「そういえば、さ」とレギナが言う。

「なに？」カインが視線を向ける。

「聞いたことなかった。お前が、なんで軍に入ろうと思ったのか」

「ああ、そっぴや話したことなかったな いや、大したことじゃないんだぜ？ 笑うなよ？」カインは照れ臭そうに笑った。「初恋の相手との、約束なんだ」

「……………なるほど」とレギナは神妙に頷いた。

「なんだよ、笑えよ」とカインは困ったような笑みを浮かべる。

「笑えるかよ。大切な人との約束を……………なんだ、まだ告白とかしてないのか？」レギナは微笑んて言う。

「もう、この世にはいないからさ。しようにもできないんだ」カインは笑いながら言った。

「……………す、すまん」

「気にすんな。もうずっと前の話だ。そこまで引きずるほど、俺は根暗じゃないさ」

カインは酒を一口飲み、虚空に視線を遣りながら言う。

「そいつも俺と同じ戦争孤児だったんだけどさ、ずっと周りの事を気遣う奴だった。周りを慰めて、元氣付けて。 あいつだって辛かった筈なのにさ」カインは続ける。「結局、そいつは病気で死んじまった。苦しくて苦しくて仕方なくて、息もまともに出来なくて、それでも、最後の力を振り絞って俺に言った言葉、何だったと思う？」

” ねえ、カイン。みんなが笑顔になれる世界を作って”

ってさ。……………自分が死にそうになってんのに、なんで他人のこと考

えられんだよ、おかしいだろ」カインの頬を一筋の涙がなぞる。彼は慌ててそれを拭った。「だから俺は軍に入ったんだ。みんなが笑顔になれる世界なんて、まず平和がなかったら始まらないからな。」

「……………」
カインのそんな言葉を聞きながら、レギナの額を冷や汗がなぞった。

何故、思い出せないんだ。

自分にも何か理由があつて、この国を守りたいと思つた筈だった。自身の命を犠牲にしてもこの国を守りたいというこの思いは、本物の筈だった。

しかし、何故だろう、思い出せなかった。自身の正義を決定づけたモノを、レギナはあろうことか、思い出すことができないのだった。

「…………レギナ？ どうした、そんな深刻な顔して」カインが心配そうにレギナに言う。

「…………いや、何でもないんだ」レギナは言った。「…………良い夢だ。本当にそう思うよ。」

「レギナ。俺達の手で、必ず、この国を平和にしよう」カインがレギナの眼を真剣な表情で見つめ、言った。彼の黄金色の瞳が、強い意志を帯びていた。「戦争を終わらせるんだ。どんな手を使つてでも、この戦争を」

レギナは一瞬黙り込んで、

「…………ああ、必ず。俺達の手で」と言った。彼の深刻そうな表情も冷や汗もすっかり消えていた。

「あ…………頭痛いい……………」

と、不意に、酔い潰れて寝ていた黒い長髪の少女 ミリーナ・アングレットが頭を抑えながら呟いた。

「飲み過ぎなんだよ、ミリ。ほら、水」とカインがグラスを差し出す。

「ん…………ありがとう」ミリーナはそれを一息で飲み干す。「はああつ

「……」
「お前……ひでえ顔してんぞ」カインが呆れ顔で言う。

確かに、目は半開きで口許から涎を垂らし、長い髪をボサボサにしたミリーナは、およそ女性としては致命的な姿をしていた。普段は美少女で通っている彼女だったが、酒を飲むと文字通り人が変わるのだった。いつも彼女に熱烈な視線を向けている男達はきっと今の彼女の姿を見ても彼女だと分らないだろう。

「煩いわね……これはヤケ酒なの。」
「ヤケ酒？」とカインが首を傾げる。

「そうよ……元々は第五十二回学院対抗試合優勝メンバーとしてみんな対等だった。なのに、何故ここまで差が開いてしまったのっ！？」大体あんたらおかしいのよ。学院は五年制だっつーの！一年とか三年で卒業してんじゃないわよっ！」

そう言うって叫ぶミリーナに、レギナとカインは苦笑する。

「んなこと言われても……」カインが言う。「てか、お前やっぱりレギナの祝いじゃなくて自分が酒飲みたいだけじゃねえか」

「何故めでたい奴を祝ってあげないといけないの？」さも当然のような顔でミリーナは言う。

「あ」とカインが何かに気づき、顔をにやつかせる。「お前、あれだろ、寂しいんだろ？」

「……は？」ミリーナがとても低い声で凄みを効かせる。

「そうだよなあ、レギナが王室付きに就任したってことは、学院からいなくなっちまうんだ。そりゃあ寂しいよな。俺がいなくなっただでさえ寂しかったのに、レギナまでいなくなっちゃうんだ、そりゃあヤケ酒もするよな　そういうことなら、いいぞ、もっと飲んで。俺が奢ってやるから」カインが納得したように言った。

「Jesus！」そう叫ぶとミリーナはカインに飛び掛かり、容赦無く四方字固めを決めたのだった。

ミリーナは本当はとも女の子らしい性格の持ち主だ。だが同時に気位の高い彼女はそういう一面を滅多に見せようとしない。だが

ら、結局はカインの指摘は凶星だったんだろう。とレギナは笑った。

「ていうかさ この店、そろそろ閉店時間じゃなかったか」レギナがふと気付いて言う。

「え、そうなの？」とミリーナが言う。「ちっ……この寝てる阿呆共を起こさなきゃ……ほらカイン、何伸びてんのよ、手伝いなさい。

って、え？ 気失っちゃってるの？」

「ミリーナ、お前……仮にも自分の好きな人だろう。そんな風に痛め付けるなよ」レギナが呆れ顔で言う。

レギナはそれを学院時代、ある出来事がきっかけで知つたのだった。それからというもの、彼はミリーナの恋の相談役となっている。「ふんっ……関係ないわ。それよりも」ミリーナはカインの顔を一瞥し言う。「こいつの身体の弱さはどうにかならないの？ 仮にも軍人が、魔術師の女の子相手にこつても簡単に気を失うなんて」

「まあ……軍人と言ってもカインは頭脳労働者だし、お前は魔術師と言ってもミリーナだし」

「ミリーナだして言うのはどういう意味よ」とミリーナが凄惨な目つきでレギナを睨む。

なんでこいつ、カインのこと好きになつたんだっけ。

レギナは苦笑して、溜息をついた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0819y/>

夜の王

2011年11月17日02時21分発行